

秋田に学べ／県民も地元の宝探そう

谷口吉光（秋田県立大学）

先日東京に行った時、埼玉県を走るJR武蔵野線に乗った。ドアが開いて乗り込んだとたん、正面の車内広告が目飛び込んできた。

「秋田に学べ」

一瞬何のことかわからなかった。首都圏の人が秋田に何を学ぶというのか。じっと見ていたら、広告の隅に小さな文字でこんな解説があるのを見つけた。

「全国学力テストで第一位（小六）の秋田県。少人数制の授業、早寝早起き、予習復習は自宅でしっかり。好成绩を生んだ、秋田の子どもたちの生活習慣に学びたいものです」

広告主は大手学習塾。なるほど。受験テクニックだけでなく、きちんとした生活習慣を身につけることも大切だと訴えたいようだ。

しばらく見つめていたが、秋田県民として悪い気はしなかった。秋田には暗い話題が多く、県民も何となく自信喪失状態だが、日頃地道に取り組んでいることが外の人に大きく評価されることもあるのだ。自分たちのやっていることにもっと自信と誇りを持ってもいいんじゃないか。

私も秋田に住むようになってずいぶん経つが、「秋田はだめだ」という議論を何十回も聞いた。「足ひっぱりの伝統がある」だの「出る杭は打たれる」だの、秋田の欠点を肴に議論して飽きることがない。それだけ保守的な県民気質に苦勞してきた人が多いということなのかもしれないが、もう少し前向きな話をしないと現状を変えることはできないといつも感じていた。

よく言われることだが、地域づくりの基本は、自分たちの住んでいる地域の「宝物」を見つけ出し、それを大切にしながら地域の発展に結びつけていくことにある。廃校になった古い校舎や荒れた谷地田が実はすごい「宝物」かもしれない。「古いものはダメ。新しいものがいい」という単純な価値観を捨てて、身近な宝物を見分ける鑑定眼を持ちたい。

男鹿に住むある友人は、男鹿の魅力を私に教えてくれる先生だ。会うとおもしろい話をとめどなく聞かせてくれる。家の前の磯に夜カゴを仕掛けておき、翌朝カゴを上げては中に入っているカニや魚を朝ご飯にする話。海草のアオサを一工夫しておいしく食べる話。男鹿の岩場に昔栄えたが今は放置されている温泉があるという話。

その友人の話を聞いていると、自分がいかに男鹿を知らないかを痛感させられる。高齢化と過疎化という暗いイメージで語られることの多い男鹿だが、その影には豊かな自然と歴史に彩られた「豊かな男鹿」が隠れているのではないか。友人は二言目には「男鹿はいいところだよ」という。見る目と生きる知恵を持てば、秋田で楽しく豊かに暮らせる。そんな気になってくる。

秋田に学べ。それは意外に秋田に住む私たちに向けられている言葉ではないだろうか。

（朝日新聞「あきた時評」 2008年5月21日掲載分を加筆・修正した）